

自衛隊OBが靖国宮司に就任 その背景にある神社界の混乱

伊藤 博敏

ジャーナリスト

高まる神社本庁総長への反発

全国約7万8000の神社を包括する神社本庁の揺らぎが収まらない。3月5日、古都・鎌倉を代表する神社の鶴岡八幡宮が、神社本庁からの離脱を明らかにした。3月15日には靖国神社が次の宮司に元海上自衛隊海将の大塚海夫氏（63）に内定したと発表し、大塚氏は4月1日に就任した。

鶴岡八幡宮の離脱理由は、吉田茂穂宮司（81）が「鷹司（尚武）統理さま（78）をないがしろにするような（神社）本庁にいる意味がない」と宮司仲間へ語った言葉で明らかのように、2期6年の慣例を無視して3期15年も総長職にとどまっている田中恆清氏（80）への反発である。

（旧華族の親睦団体である）霞会館が神社界に距離を置くようになりました。そんな人材不足も自衛隊OB招致の理由のひとつでしょう」

田中総長は宗教法人神社本庁のトップではあるが、その上に宗教団体としての神社本庁を束ねる「統理」という役職があり、18年5月からその職にあるのが五撰家のひとつ鷹司家の当主で、上皇陛下の甥にあたる鷹司氏だ。

鷹司氏は、「総長は、役員会の議を経て、理事のうちから総長を指名する」という神社本庁規第十二条の規定によって菅原氏を総長に指名した。ところが田中氏サイドは「議を経て」とは多数決のことだととして異議を唱え、総長職に居座った。

多くが保守思想の持ち主で「敬神尊皇」を基本とする神職にとって統理は別格で、大半が「統理さま」と尊称をつける。「ないがしろにしたから」という鶴岡八幡宮の吉田宮司の離脱理由にそれは表われており、そんな空気が神社界に人材を供給する旧華族にも醸成されているということだろう。

では、鷹司統理の反発を受けても田中氏が総長職に居座るのはなぜなのか。

鷹司統理は、22年5月末の役員会で、4期12年、総長を務めた田中氏に「田中さん、ご苦労さま」と声をかけて新総長に北海道旭川神社宮司の菅原高穂氏（71）を指名した。ところがこれを不満とした田中氏サイドは「役員会は菅原氏を選任しなかった」として田中体制の存続を決めた。不服として菅原氏サイドは総長の地位確認を求めて訴訟を起こし、一、二審とも敗訴で、現在、最高裁で審理中だ。

自衛隊OBの靖国神社宮司への就任も、こうした神社本庁の騒動が背景にある。有力神社宮司が解説する。

「靖国（神社）の歴代宮司は、国のために殉難した人の霊を祀るといって性格から旧華族が宮司を務めることが多かった。しかし一連の鷹司統理への『仕打ち』から、

政治的タカ派と結んだ利権一派

話は15年10月に遡る。本庁資産の神奈川県にある百合丘職舎が、本来、競争入札が原則のところ随意契約でデザイン・インターナショナルという不動産会社に売却された。同社は即日転売で約3000万円の利益を得たが、物件は売却を繰り返されて半年後、3億500万円に跳ね上がった。

この安値売却が問題となりデザイン社を調べたところ、過去にも本庁資産の売却に独占的に関与したほか、同社の関係会社が『皇室』というビジネス誌の直販の販売元にして社内での自販機設置に関係するなど本庁に食い込む利権会社であることが判明した。そのデザイン社の代表が食い込んでいたのは静岡県小國神社の打田文博宮司（70）だった。

打田氏は元神社本庁職員。本庁内で頭角を現すのは85年に組織渉外部で政界を含む時局政策を担当することになってからで、やがて渉外部長として対外窓口を一手に引き受け、安倍晋三元首相ら政治的タカ派との交渉を担当し、日本宗教連盟事務局局長、日本宗教連盟事務局局長等を歴任し、「本庁事務方の顔」となる。従って00年の小國神

社転出後も歴代総長は打田氏を手放さず、「役員特別補佐」などの肩書を与えた。07年に神道政治連盟幹事長に就任する頃には本庁人事に圧倒的な影響力を行使する存在となっていたという。

04年に副総長、10年に総長に就任した田中氏は、政界を含めて各界に顔が広く、調整上手で自分に尽す打田氏を重用して田中―打田体制と呼ばれる支配体制を築く。

百合丘職舎問題は図らずも田中―打田体制の内実を表面化させ、利権化の実態を批判する「檄」と題する告発文書が作成された。本庁は「犯人捜し」を行ない、その檄文に関与した2人の幹部職員を処分（1人を解雇、もう1人を降格）したところ、17年10月、2人は処分不当で東京地裁に提訴した。

結果は神社本庁の敗訴だった。地裁は売買の価格決定や承認過程において取引通念上、不審な点があることを指摘したうえで、「内部告発には真実に足りる相当な理由があった」とし、通報に不正な目的があったとはいえず、その手段も相当であったとした。

神社本庁は控訴したものの敗れ、上告を受けた最高裁は、22年4月、これを退け、処分無効が確定した。田中氏が3期、4期と総長職を続けたのは、「田中―打田体

組織崩壊の危機に瀕する神社本庁

そこまで抵抗する田中恆清とはどんな人物か。京都府八幡市にある石清水八幡宮の社家（神社を世襲する家柄）に生まれた。國學院大学の神道学科を修了して平安神宮の権禰宜を経て石清水に戻り宮司となった。石清水は鶴岡八幡宮、大分県の宇佐八幡宮と並ぶ日本三大八幡宮のひとつ。神宮本庁で副総長、総長の要職に就いたことと合わせ、恵まれた神職生活である。

「田中さんが頭角を表わすのは、若手神職の集まりである神道青年全国協議会の会長（83〜85年）になってからです。理論家でありながら気難しいところもなくざつくばらん。お酒を飲んで談論風発し、頭の回転が速く、当意即妙の受け答えが絶妙でした。後輩の面倒見も良く、神社界を背負っていく人物だと思っていたら、副総長、総長と順調に出世し、日本会議副会長として草の根保守を支える存在にもなった。その人がどうして総長にとどまって本庁を私物化しているのか。打田氏のような取り巻きに祭り上げられ、自分を見失っているんでしょう」（青年協議会の時から付き合っている宮司）

田中―打田体制の反発は全国に拡がっている。00年11

制が内包する利権体質」という指摘を認めたくないからだろう。

田中氏は18年9月の役員会で一度は辞意を表明したものの、翌月には翻意して居座った。

「打田さんとコンビを組む間に、本庁内に利害を共にする強固な田中派が出来上がっていました。彼らにしてみれば、中途半端に田中さんに去られたら困る。そこで打田さんが必死に説得した」（本庁幹部）

鷹司氏は伊勢神宮大宮司を経て統理に就いたが、神職になるまでNECで会社員生活を送り、NEC通信システム社長を務めるなどそれなりの社会生活を送っており、ガバナンス強化、コンプライアンス重視といった法人規制の流れを承知していた。

従って田中氏の翻意には批判的で、18年10月の役員会での統投宣言を受けて「上に立つ人が、言ったことを軽々しく変えてはいけない」と苦言を呈した。それだけに最高裁判決を受けた後の役員会でねぎらいの言葉をかけたうえで、新総長を指名した。「議は多数決」は理屈だが、「利権疑惑」を裁判所に指摘されて確定し、それを憂う統理が引導を渡したのに辞めないのは、宗教団体としては異例だろう。

月には「こんびらさん」の愛称で知られる香川県琴平町の金刀比羅宮が神社本庁を離脱した。天皇の即位関連儀式「大嘗祭」の供え物に関するトラブルが直接の原因とされるが、「金刀比羅宮の宮司はかねて田中総長に批判的だった」（本庁元幹部）ということも鶴岡八幡宮に先んじた離脱である。

神社本庁の揺らぎはこれからも続き、やがて激震となる予感もある。

5選を巡り統理と総長の争いが本格化して以降、本庁には「統理様のもとで神社界の真姿を顕現しよう」を合言葉にする「花菖蒲ノ会」が設立された。22年9月1日に発行した会報第1号の会員数（賛同者）は159名。立ち上げ当初は、個人的なネットワーク利用で賛同者を募ってきたが、その後「思いを同じくする方々に広くご賛同を呼び掛ける」として活動を活性化させた結果、現在は2000名に達したという。

呼び掛け世話人には、出雲大社、熱田神宮、東京大神宮、北海道神宮、多賀大社といった有名神社が名を連ねており、離脱した鶴岡八幡宮も世話人だった。地位に恋々とする田中氏の居座りが神社界に亀裂を走らせ、神社本庁は組織崩壊の危機に直面している。